「保護者・地域との連携を基盤とした防災教育」

平成 25 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校　土佐市立宇佐小学校

Ⅰ　学校における背景、問題意識

宇佐地区は、かつお節発祥の地であり、古くから漁業で栄えてきた町である。また、かのジョン万次郎が乗った船が出港したゆかりの地でもある。

本校の３階からは、本当に美しい太平洋を一望することができる。

しかし、海からの直線距離約 300m、海抜約 3.2mに位置する本校は、南海トラフ地震の想定においては、震度６強、24 分で 30 ㎝の津波が到達、最大浸水深９ｍと想定され、甚大な被害が予想されるところに立地している。

避難場所は、本校北西約 400mにある裏山、通称「タンク山」と呼ばれる高さ 14m の所にある。しかしながら、この避難場所は大変狭いところでもあり、高さも安心できない状況にある。

また、避難場所周辺は低くなっており、一度押し寄せた津波は、すぐには引きそうもなく、長期浸水も考えられる。大津波警報が発表されている間は、身動きとれない状況も想定され、そこから先は、裏山のけもの道のようなところを登っていくしかなく、実に悩ましい問題を抱えている。

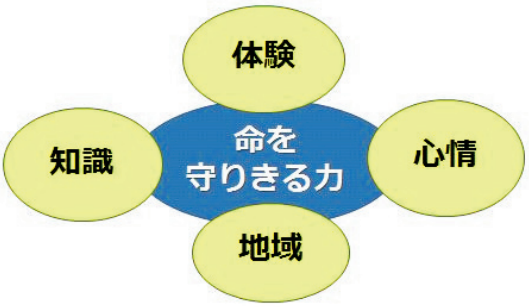
こうした背景の中、本校では数年前から地震津波避難訓練を実施したり、５年生を中心に総合的な学習の時間で「防災教育」を行ったりしてきた。

そして、平成 25 年度高知県実践的防災教育推進事業の指定を受け、保護者・地域との連携を基盤に、全学年が年間を通じた防災教育の方策について研究を進めることとした。

Ⅱ　取組のポイント

防災教育の視点

まず、取組を進めるに当たっては、次のような防災教育の視点を持って、防災教育全体計画を作成した。



防災教育の究極の目的は､「命を守りきる力」だととらえ、本校では大きく

●知識　●体験　●心情　●地域

の４つの領域に分けて、ねらいを持ち、総合的に取り組んでいこうと考えた。

そして、防災教育目標を下記の３つに設定し実践に取り組んだ。

≪防災教育目標≫

◎災害発生時に危険回避ができるような、判断力・行動力を育てる。

◎よりよく生きるために、地域の一員として自分にできることは何かを考え、他と協調して活動できる力を育てる。

◎災害や防災に関する様々な知識を身に付ける。

Ⅲ　取組の概要

１　実践的な避難訓練の実施

児童が「いつどこにいても、自分の命を守りきる力」を身に付けるためには、様々な場面を想定した避難訓練が必要であり、１カ月に１回、次のような場面を想定した避難訓練を計画し実施した。

（避難訓練の様子）

＊授業中　＊休み時間　＊清掃時間
＊始業前　＊下校中　＊在宅時　など

訓練後は反省会を持ち、次の訓練へと活かすようにした。

そうした中で、地震の起きる時間帯を変えるだけでなく、通常の避難経路が通れなくなっている場合やけが人が出た場合なども想定した避難訓練も計画をし、実施していった。

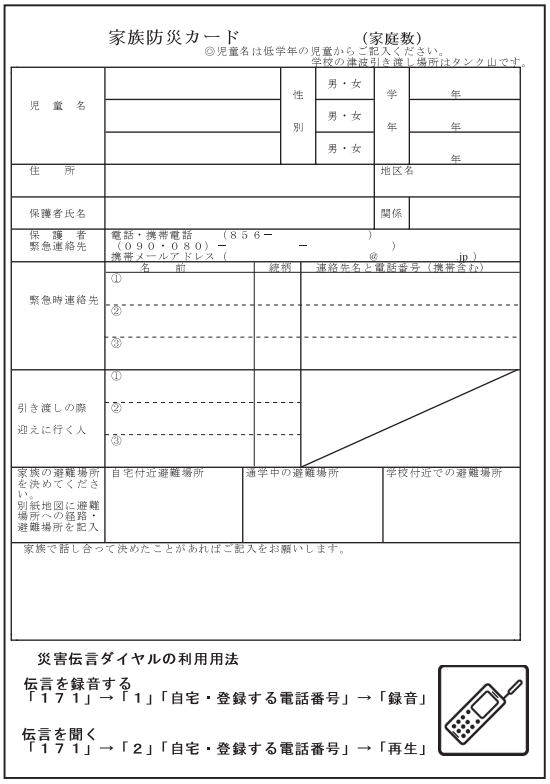
２　防災家族会議

５月に防災意識アンケートを取ったところ、本校は、大きな津波被害が予想される地域にもかかわらず､保護者の防災意識は、決して高いものではなかった。

そこで、９月に「防災家族会議」を各家庭で行うように計画した。

防災家族会議では、それぞれの避難場所や緊急連絡先、引き渡しの際、迎えに行く人、家族で話し合ったことなどを記入できる「家族防災カード」と「我が家の避難地図」の作成をお願いし、家族で話し合いながら、避難経路などを記入してもらった。

《家族防災カード》



家族防災カード　　（家庭数）

◎児童名は低学年の児童からご記入ください。
学校の津波引き渡し場所はタンク山です。

児童名		性別	男・女	学年	年
			男・女		年
			男・女		年
住所				地区名	
保護者氏名				関係	
保護者緊急連絡先	電話・携帯電話　（８５６－　　） （０９０・０８０）－　　－　　） 携帯メールアドレス（　　@　　jp）				
緊急時連絡先	名前		続柄	連絡先名と電話番号（携帯含む）	
	①				
	②				
	③				
引き渡しの際迎えに行く人	①				
	②				
	③				
家族の避難場所を決めてください。別紙地図に避難場所への経路・避難場所を記入	自宅付近避難場所		通学中の避難場所	学校付近での避難場所	
家族で話し合って決めたことがあればご記入をお願いします。					

災害伝言ダイヤルの利用用法

伝言を録音する
「１７１」→「１」「自宅・登録する電話番号」→「録音」

伝言を聞く
「１７１」→「２」「自宅・登録する電話番号」→「再生」

また、地図には自宅から一次避難場所までの時間や、自宅から学校までの時間も記入できるようにした。

このことによって、家族で避難場所や避難経路の確認ができたり、被災時どうするのか話し合いをしたりするなど、防災意識を持つ良い機会となった。

また、記入後は家族が見える場所に貼っておくことをお願いし、いざという時の活用を目指した。

《我が家の避難地図》

３　避難場所巡り

防災家族会議で出された避難地図をもとに全校で避難場所巡りを実施した。

宇佐地区の避難場所整備が進んだのは、最近ということもあり、避難場所への誘導看板も少なく､地域には 20 あまりの避難場所がありながら、多くの子どもたちは、どこに避難場所があるのか、それは、どの道を通れば良いのかなど、自宅周辺の避難場所以外はあまり知らなかった。

そこで､縦割り班を活用して､12 月には、学校周辺の６箇所の避難場所を、そして、２月には残りのうち５箇所の避難場所を巡り、位置や経路の確認をした。

（避難場所巡り中の様子）

また、その途中で地震が起こった時を想定し、とっさに身を守る行動も確認をした。

（十郎谷避難場所）

右の写真は灘地域にある十郎谷避難場所の様子である。高齢者に上りやすい傾斜で、ゴム製の階段になっている。上には防災倉庫もあり海もよく見える。工事中の所が多い中、完成している避難場所だったので、子どもたちの間からは、「いいね、灘は安心やね」という声が聞かれた。中には、「避難場所への表示が分かりにくい」「階段までの道が狭い」という心配する意見もあった。

避難場所巡りをする中で、子どもたちが自分たちの避難場所に興味、関心を持つようになっていった。

（渭浜砂防ダム避難場所）

右の写真は渭浜砂防ダム避難場所である。この時点では完成していなかったが、登り口の場所を確認した。

夜間の避難に備えて、太陽光発電の器具がついていることも知ることができた。

4　USA 小防災デイ＆ 防災キャンプ ~地域や防災関係機関等との連携~

平成 24 年度に初めて行った防災キャンプでは、自主防災組織・市防災対策課・高知大学・地域・保護者の方々の協力を得ることにより、大きな成果を上げることができた。

そこで平成 25 年度は、5 年生が参加する「ＵＳＡ小防災キャンプ」だけでなく、全校的に地域や防災関係機関、保護者を巻き込んだ取組となるよう「ＵＳＡ小防災デイ（以下「防災デイ」という）を新たに加え実施した。プログラムは、以下の通りである。

＜防災デイ＞

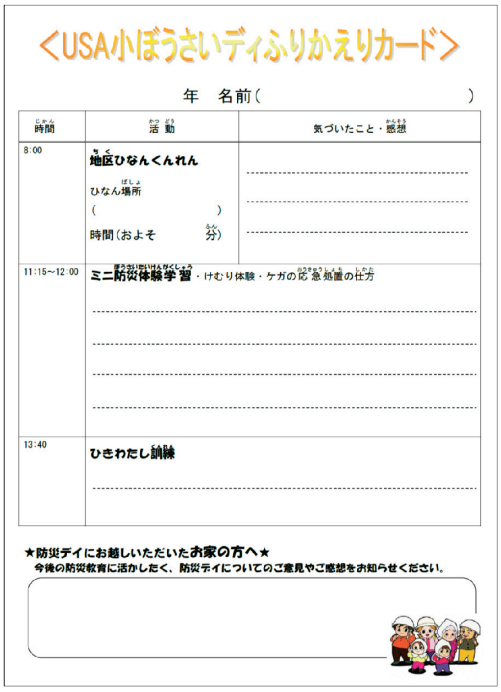
11 月 17 日(日)防災デイ　プログラム(参観日を兼ねる)	
８:00～	地区合同津波避難訓練 （自宅から最寄りの避難場所へ）
10:15 ２校時	【１／２／３年】参観授業(各学年の教室) 【４／５／６年】防災体験活動 （体育館）･･･ケガの応急処置法
11:15 ３校時	【１／２／３年】防災体験活動 （体育館）･･･防災ゲーム 【４／５／６年】参観授業(各学年の教室)
12:00	昼食（炊き出しによるカレー） 体育館で避難場所毎に集まり、保護者も一緒に食事
13:20	児童･･･学級指導 保護者･･･訓練説明会
13:40	児童引き渡し訓練の開始 （避難場所が工事中のため運動場で）

まずは、地域で行われた「地震津波合同避難訓練」に、全員参加した。朝８時の避難サイレンとともに、全児童が家庭で決めた避難場所へ避難し、所要時間を計った。

事前に「防災デイ」カードを配付し、そこに所要時間や気付いたことなどを記入し、後の振り返りに役立てるようにした。

「防災デイ」カード

≪低学年用≫



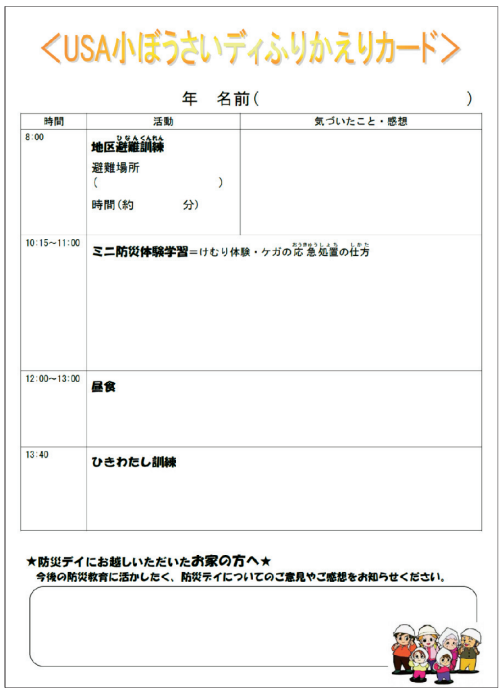
＜USA小ぼうさいディふりかえりカード＞

年　名前（　　）

時間	活動	気づいたこと・感想
8:00	地区ひなんくんれん ひなん場所 （　　） 時間（およそ　　分）	
11:15～12:00	ミニ防災体験学習・けむり体験・ケガの応急処置の仕方	
13:40	ひきわたし訓練	

★防災デイにお越しいただいたお家の方へ★
今後の防災教育に活かしたく、防災デイについてのご意見やご感想をお知らせください。

≪高学年用≫



＜USA小ぼうさいディふりかえりカード＞

年　名前（　　）

時間	活動	気づいたこと・感想
8:00	地区避難訓練 避難場所 （　　） 時間（約　　分）	
10:15～11:00	ミニ防災体験学習＝けむり体験・ケガの応急処置の仕方	
12:00～13:00	昼食	
13:40	ひきわたし訓練	

★防災デイにお越しいただいたお家の方へ★
今後の防災教育に活かしたく、防災デイについてのご意見やご感想をお知らせください。

その中には､「お年寄りが坂を上がって来るのがとてもしんどそうでした。」「自分も声を掛けながら、一緒に避難できるようにしたい。」など、自分だけでなく、他者への思いやりを書く児童が少なくなく、防災教育の中で、心も育っていることがうかがえるものであった。

また、20 箇所の避難場所では、６年生を担当者として小学生の人数把握を依頼しておき、６年生も責任を持って人数の記録をした。

そして、最後に本校では初めての「緊急時児童引き渡し訓練」を実施した。

（引き渡し訓練の様子）

保護者には事前に引き渡し方法を説明し、この時は避難場所のタンク山が工事中だったため、運動場で行った。

保護者の方からは引き渡し方法が分かり、安心できたとの声をいただいた。

＜防災キャンプ＞予告なしの夜間避難訓練

今年度のキャンプは、子どもたちで役割を決め、できるだけ自主的な避難所運営ができるよう計画した。

11 月 17 日（日）　防災キャンププログラム（５学年のみ）	
14:00	防災学習①　防災用具の活用について ・学習と飛散防止フィルム貼り体験
15:45	５年生防災キャンプ開始（体育館） ・キャンプの想定シナリオの説明 ・キャンプ運営の必要な段取りを考える
16:00	宿泊準備 ・毛布、アルミマット等の配給、床づくり
17:00	夕食（炊き出し体験） ・アルファ米、竹飯、飯ごう、持ち寄り野菜を入れた味噌汁
	夜間避難訓練（児童への予告無し）
20:00	防災学習②　防災クロスロード ・災害時に起こりそうな問題で、友だちと意見交流
21:00	防災学習③　一日の振り返り
21:45	班会、班長会
22:00	就寝
11 月 18 日（月）	
６:00	起床、ラジオ体操、朝食（乾パン・水）・宿泊場所の片付け
８:30	防災学習④　我が家の安全な家具の置き方
	防災学習⑤　キャンプのまとめ、地域への提言
11:30	昼食（炊き出し体験） 炊飯、ダッチオーブン料理
13:30	修了式

食事は、自主防災組織の方の力をお借りし、槇で火を焚き、災害時に役立ちそうな炊き出し体験をした。

防災学習では、保護者の方と一緒に、飛散防止フィルム貼りの体験を行い、また、クロスロードを通して、災害時に起こりそうな状況から「自分ならどういう行動を取るのか」を、子どもたち同士が意見交換をしながら深く考える学習も行った。

また、子どもたちには予告せず、抜き打ちの夜間避難訓練も行った。緊急地震速報の知らせを聞き、子どもたちは、とっさに机の下に入ったり、毛布をかぶったりした。

（夜の避難訓練：タンク山）

その後、タンク山避難場所に避難し、夜間避難の怖さ、厳しさを肌で感じることができた。

地元消防団や自主防災組織の方々が、避難道で避難する子どもたちを見守って下さり、大変有難かった。こうした協力があっ

てこその夜間避難訓練であった。

また、１日の終わりにはキャンプの振り返りをするとともに、最終日にはキャンプで学んだことを通して、防災への提案をまとめた。

子どもたちにとって津波からの避難後に想定される生活を、仲間と共に知恵を出し合いながら体験した１泊２日であった。また、命の大切さを考え、仲間といることの心強さを知った防災キャンプでもあった。

この防災キャンプの実施に当たっては、防災デイ同様、多くの地域、関係機関の皆様方にご協力いただき、大変お世話になった。保護者からの返信にも「参加して大変良かった。」「有意義な取組だった。」「地域の方々も協力してくれて安心した。」など、大きな反響があった。

５　その他の学年の取組

＜２年生＞

生活科の時間に校区探検の中で地域の避難場所の確認をした。

自宅近くの避難場所だけでなく、友だちの利用する避難場所も確かめた。そして、色々なことに気付き話し合いをし、どんな避難場所なら安心かを考えていった。

＜３年生＞

社会科の中で校区探検を行い、その後、総合的な学習の時間に「町たんけん」として、通学路の危険な箇所を調べ、それをまとめ発表していった。

さらに３学期には、子どもたち自身がビデオカメラで撮影し、通学路での安全な避難の仕方を１年生に教えるという学習に発展させていった。

＜４年生＞

総合的な学習の時間に「地震や津波から身を守るには」というテーマで、地震・津波に関する知識を学習するとともに、地域の標高調べを行い、標高別に色分けしたマップづくりを行った。

＜６年生＞

総合的な学習の時間を使って「自分にできることを考えよう」というテーマで、前年度に体験した防災キャンプを活かし、取り組んでいった。

地域にある高齢者施設と保育園との交流を企画し、その中で、合同の避難訓練も行うことができた。

そして、これらの体験を基に、自分たちにできることは何かを考えていった。

６　教職員の研修

防災教育については、学ぶことが少なかった教職員も多く、積極的に研修の機会を持つようにした。

まずは「高知県安全教育プログラム」がこの年出されたことを受け、学校安全対策課に依頼し、防災教育の要点や学習指導案の立て方についてご指導いただいた。

そして、夏休みの研修では、岩手県の中学校で教鞭を取られている志田竜彦先生をお迎えし、東日本大震災の貴重な体験をお話しいただいた。

（教員研修会）

また、教員の代表が宮城県の被災地まで視察研修に行った。現地の学校や教育委員会に出向いて被災の厳しい現実を知る中で多くのことを学び、帰校後は全教職員に報告をし、研修成果を広げた。

（被災地視察研修・大川小学校）

12 月には宮城教育大学教授 相澤秀夫先生をお迎えし、４年生以上の児童が東日本大震災の体験談をお聞きすることができた。相澤先生の一つひとつの言葉に、子どもたちは想像を広げ「思いやり」がどれほど大切であるのか、震災後も強く生きようとする現地の人たちの姿に勇気をもらい、「何としても生きのびよう」との思いを胸に刻んだ。その後、教員向けにも講話をいただいた。

（宮城教育大学教授 相澤秀夫 先生を迎えて）

Ⅳ　成果と今後の取組

１　成果

○能動的な避難訓練

それまでは、どちらかというと受け身であった避難訓練が自分で最善の避難について考え、行動しようとしだした。

○主体的かかわり

様々な取組を通して、防災の視点で環境を見たり、周囲のことを考えたりと、より主体的にかかわろうとする態度や見方・考え方が育ってきた。

○とっさの行動力の向上

揺れた後は走って高い所へ逃げるということが身に付き、とっさの場合でも、自ら判断して、できることをやろうとする姿が増えてきた。

学校休業日に実際に緊急地震速報が鳴り、私たちも慌てたことがあった。後日、子どもたちにどういう行動を取ったのかを尋ねてみると、上級生になるほど、身を守る行動や、迅速な避難に向けた行動ができていたことが分かった。保護者の方からも「親がいなくても、自分たちで冷静に行動しようとしていて、防災学習の成果をすごく感じました。」という声が届けられた。

○防災意識の向上

子どもも保護者の方も共に、防災意識が高まってきたことである。

アンケートの結果からも、ほとんどの保護者から、自分の子どもの防災意識は高まってきていると感じており、保護者自身も、そうした子どもたちを通して、防災に対する関心が深まりつつあることが窺えた。

○避難場所の確認

避難場所の確認が進んできたことは、全校で避難場所巡りをしたこともその要因ではあるが、防災学習を通して、子どもたち自身が、避難場所を知っておかなければならない、知りたいと思う意識が向上してきたからだと捉えている。そして、ここで地震にあったら、どこに行けばいいのかを考えるようになってきている。

２　課題

○あらゆる想定に対応できる力

これまでの取組だけでは、突然の地震に備える力は、 まだ十分に育ってはいない。特に、子どもが一人でいる時に避難できるかどうかには大きな不安がある。

○さらなる地域とのつながり

地域とのつながりは、少しずつ広がっているとはいえ、まだまだであり、子どもたちが、積極的に地域につながっていけるような仕組みを、今後作っていく必要があると考える。

○地域をもっと知るために

地域を知り、地域を愛する子どもの育成に向けた取組においては、宇佐の地域に特化したものが、今年度はあまりできていなかった。 今後、地域教材の開発を含めた、郷土愛を育む教育にも力を入れていく必要がある。

○保護者を巻き込んだ取組や啓発

保護者も巻き込んだ防災の取組や保護者への啓発に弱さがあった。保護者の防災意識が高まってきているとはいえ、意識の格差も大きく、一層の工夫と努力が求められている。

○地震への備え

家庭での地震への備えがまだまだ弱い状況が見られる。保護者へのアンケートで「家庭では、地震に備えて準備をしていますか。」の項目においては、残念ながら５月と 12 月実施の結果を比べても、ほとんど向上していなかった。学校だけでは子どもの命を守ることにならないということも含めて、さらなる啓発の必要性を感じている。

３　今後に向けて

県の指定を受けて、本校も初めて全学年が防災学習に取り組んだ。

そんな中で、何よりもうれしかったことは、子どもたちが真剣に学習に向かい、たくましく成長していく姿を見られたことであった。

しかし本校の取組は、まだ始まったばかりである。今後も子どもたちの明日の笑顔のために、教職員一丸となって努力し続けていきたい。